

序論

本論文は、マンガにおける「性別越境」の表現について考察することを目的とするものである。2000年以降、「性同一性障害」や「LGBT」などの概念と共に、性的少数者の抱える問題が可視化されてきたが、近年では性的少数者を超えて、多様な性の在り方そのものについて考えることが必要とされるようになった。しかし、フィクション作品—とりわけマンガ作品においては、既に多様な性の在り方が頻繁に描かれてきたように思われる。特にキャラクターの性別が移行するようすは古くから取り上げられてきた題材であり、性別を越境するキャラクターを挙げると枚挙に暇がない。しかしフィクション作品における性別越境のマンガ的な表現に対して、我々はどこまでの視座を持っているだろうか。性の多様性が叫ばれる現代だからこそ、マンガ作品の中で性別越境がどのように表現されるかについて、深く考察する必要があるのではないだろうか。そこで本稿では志村貴子によるマンガ作品である『放浪息子』の作品分析から、マンガにおける性別越境の表現に対して新たな視座を得たい。そして本稿における考察を通じて、「性別」そのものに関するマンガ表現の可能性をより広げること貢献したい。

本論では『放浪息子』において性別越境キャラクターの性別がどのように表現されるかについて論じていくが、分析を深めるためにまず一章で分析に際して必要な情報を整理したい。二章では「『越境者』と『観測者』の対置」という性別越境の表現に対する本稿独自の観点を導入し、それについて特定の有名な作品を取り上げながら説明する。そして二章で得た理論をもとに、三章で『放浪息子』の作品分析に入る。「観測者」の視点の導入によって、「図像」による表現や性別越境キャラクターの表象についての分析とはまた違った視点から「性別越境」キャラクターの性別をより深く捉え、マンガにおける「性別越境」の表現を考え直したい。

第一章 はじめに—分析するにあたって

1. マンガにおける性別表現について

性別越境というモチーフを考察するに際して、まずはマンガにおける性別の表現のそのものの特徴について論じたい。その特徴とは、マンガにおけるキャラクターの性別表現が不透明性を抱えていることである。これまでマンガ作品では、男性を女性だと勘違いして恋をする、または「男っぽい」女性を男性に間違えるなど、性別に関するミスリードが多数描かれてきた。キャラクターの性別を読者が知っている場合もあれば、読者にも知らされていない場合さえある。例えば少年ジャンプに連載されている有名作品『HUNTER×HUNTER』¹にクラピカというキャラクターが登場するが、中性的な外見であるために男女の判別がしにくく、またその情報が明示されないので、クラピカが男か女かといった話題がしばしば読者を賑わせた。キャラクターの性別というのはマンガ作品においてしばしば読者の興味の対象となり、また、ストーリーのエッセンスにもなるのであ

¹ 富樫義博『HUNTER×HUNTER』、東京:集英社、1998年。

る。そのように自由な性別の表現が可能になるのは、マンガというメディアにおける性別の不透明性によるものである。それでは、なぜマンガ作品において性別は不透明なのだろうか。斎藤によると、マンガは「図像」「コマ」「言葉」の三つの要素で構成されるのだが²、この中でとりわけ「図像」について、岩下は「現実中存在する対象ではなく類型化されたイメージを参照項として形造られている」³と述べて、記号的な表現が持つ非現実性について言及している。つまりマンガのキャラクターは潜在的に、現実中存在するジェンダーの縛りを受けないということがわかる。マンガというメディアは、生身の人間が演じるドラマや劇、またはアニメーションにおける「声」のように、その人物の性別を決定づける(もしくは推測させる)決定的な要素を備えていない。ゆえにマンガは、「図像」の表現における類型化されたイメージの利用であったり、「言葉」による作品内での説明によって、キャラクターの性別を意図的に表現し、情報として読者に伝えなければならない。岩下は、それらのような情報を「形式的水準」(図像によって明示的に表される情報)と、「内容的水準」(ストーリーの展開や内容によって表される情報)というふたつの概念のもとで論じた⁴。マンガというメディアは性別に関する決定的な要素を持たないので、性別の表現に関して不透明性を抱えている。ゆえに作者は「形式的水準」と「内容的水準」の双方によって、意図的にキャラクターの性別を表現している。作者によって与えられたキャラクターの性別に関する情報を読み込むことによって、読者はキャラクターの性別を認識する。まとめると、マンガ作品における性別表現の多様性は、マンガというメディアそのものがもつ性別表現の不透明性によるものであること、そしてそれ故に作者は性別に関する情報を意図的に表現する必要があることを本節で確認した。

2. 分析の意義と対象

では、まずは性別越境のマンガ的表現を分析することの意義について記したい。マンガにおける性別表現については先に論じた通りであるが、ただし大抵のマンガ作品において、キャラクターの性別は所与のものであるかのようにさりげなく表現されている。性別を決定づける要素を持たないマンガというメディアにおいて、キャラクターの性別は作者による意図的な表現であるのだが、マンガ上における性別の表現についても読者が覚的になる機会はほとんどないし、ともすると作者自身もそれについて無自覚である場合も少なくないだろう。なぜなら多くのマンガ作品において、性という大きな命題が描かれることはあっても、そのキャラクターの性別がどのようなものであるか自体についてはテーマにならないからである。性別というのは日常の中に深く浸透しているので、マンガにおいても、それ自体がテーマにならない限り、あくまで所与のものであるかのように描かれる場合が多いのである。しかしながら、マンガにおけるキャラクターの性別表現に対して、自覚的にならざるを得ない場合がある。それは、作中で性別越境をするキャラクターの姿が描かれる時である。ここで言う「性別越境」とは、とあるキャラクターが何らかの目的をもって所与のジェンダーとは別のジェンダーを表現しようとする現象のことをいう。キャラクターが作中でジェンダーを越境するようすを表現するには、移行する前後の性別に関する情報を、読者に自覚的に受け取らせなければならない。マンガにおける「性別越境」を分析することによって、普段所与のものであるかのように自覚されないキャラクターの性別表現を可視化することができ、マンガ表現の手法に新たな視座が与えられることに繋がる。ひいては性別の概念そのものに対して考え直すきっかけにもなるだろう。

それでは次に、分析の対象について詳しく説明する。本稿で対象とするのは、「作品内で性別越境が行動として観測できる」マンガ作品である。キャラクターが作中で複数のジ

² 斎藤宣彦「マンガの構造モデル」『別冊宝島 EX マンガの読み方』、東京:宝島社、1995年、220-223頁。

³ 岩下朋世『少女マンガの表現機構』東京:NTT出版、2013年、113頁。

⁴ 岩下、同書、86頁。

エンダーを経験することが前提であり、そこでどのように対象キャラクターの性別表現されていくのかを考察したいからである。ゆえに、必ずしも「トランスジェンダー」や「男の娘」を対象とするわけではない。たとえば『ストップひばりくん!』⁵において主人公の大空ひばりは、男性であることを隠し女子生徒として学校に通う「男の娘」の先駆け的キャラクターであるのだが、大空ひばりは身体性が男性であるものの、作中では一貫して女性の表象で描かれる。そのように、キャラクターがジェンダーを移行しようすが観測されない場合は、本稿では対象としないものとする。また、身体の完全なる転換を描く TS(トランスセクシュアル)マンガは除くこととする。TS マンガは、主に「入れ替わり」「憑依」「変身」などによって生物学的な性別が転換する作品群のことであり、これもまたマンガのモチーフとして頻繁に描かれてきた。たとえば『らんま 1/2』⁶では、主人公であるらんまが、水をかけると体が女になり、お湯をかけると男になるという設定で描かれている。もちろんそれらにおけるキャラクターも性別を越境することに間違いはないが、本稿はジェンダーの越境を扱うものであり、生物学的性の越境に焦点をあてるものではない。むしろ同一の身体を持ったひとりのキャラクターのジェンダーが移行を経てどのように表現されるのかについて考察するものである。身体(身体表現ではなく身体性を指す)の不変性が必要とされる。よって身体性の完全な転換は本稿の分析対象として適さないとした。

3. 作品の紹介

「作品内で性別越境が行動として観測できる」マンガ作品として本稿で分析の対象にするのは、志村貴子による日本のマンガ作品『放浪息子』⁷である。はじめに内容を以下に記す。

「女の子になりたい男の子」である二鳥修一は、転校先の小学校で「男の子になりたい女の子」高槻よしのと出会う。女の子の服を着たい自分の想いに気づいた二鳥修一は、高槻よしのと共に異性装をして外出することを繰り返す、自分らしい性別の在り方を模索する。しかし学校生活や人間関係、中学生になって経験する二次性徴など、さまざまな環境の変化を経験する中で、女の子になりたい気持ちを持ち続ける二鳥修一とは対照的に、高槻よしのは徐々に性別違和を抱かなくなっていく、二鳥と距離が離れていく。多感な思春期を通して性別を放浪する二人の成長が丁寧に描かれた作品である。

『放浪息子』における「性別越境」は、ファンタジーと明確に区別して描かれている。というのも、志村のデビュー作である『ぼくは、おんなのこ』⁸では、「ある日生まれ変わったら男女の性別が入れ替わる」という TS マンガのモチーフが使用されたが、『放浪息子』はそのファンタジー性と対比するかたちで、現実性を持った性別のありかた(身体性やジェンダー規範など)が描かれたという⁹。また、『放浪息子』には性別越境キャラクターが数人登場するが、本稿で焦点をあてるのは「女の子になりたい男の子」である主人公の二鳥修一である。なぜなら、二鳥修一がジェンダーを越境しようすは小学五年から高校を卒業するまでの間を通じて詳細に描かれるし、なにより二鳥修一に関する身体の問題(身体的特徴や身体の成長)は非常に繊細に表現されるからだ。本稿は「図像」にみられるような「形式的水準」での考察ではなく、あくまで「内容的水準」での物語分析を主とするのだが、二鳥の身体的特徴とその変化は物語内容に大きく影響を与えるものである。繊細に描かれる二鳥の「図像」表現は本稿の分析において重要である。性別に関して現実性

⁵ 江口寿史『ストップひばりくん!』全四巻、東京:集英社、1981-1983年。

⁶ 高橋留美子『らんま 1/2』全38巻、東京:小学館、1987-1996年。

⁷ 志村貴子『放浪息子』全15巻、東京:エンターブレイン、2002-2013年。

⁸ 志村貴子『ぼくは、おんなのこ』、東京:エンターブレイン、2004年。

⁹ 志村貴子「魔法が生まれる瞬間 志村貴子という DNA の描く螺旋」『ユリイカ』第49巻第20号(11月臨時増刊)、東京:青土社、2017年、27頁。

を持った世界観において、性別に関する表現が繊細に描かれる二鳥修一の「性別越境」を考察するという事は、本稿の意義を充分達成するものであるだろう。

また、『放浪息子』を選定するには、社会的評価という観点もあった。『放浪息子』は2002年から2013年までコミックビームスにて連載されており、2011年にフジテレビ系列にてテレビアニメ化もされている。また、文化庁メディア芸術祭において、第10回(2006年度)および第17回(2013年度)の2度にわたって、マンガ部門・審査委員会推薦作品に選出された。さらに、台湾、韓国、米国でも出版されている。特に英語版の『放浪息子』は、「米国ヤングアダルト図書館サービス協会(YALSA)」が優れたティーンズ向けグラフィックノベル10冊におけるグラフィックノベル賞に2012年に選定されていて、これはセクシュアルマイノリティを描いた日本の漫画作品としては初めてである。他にも、LGBT読本の選出集である『にじ色の本棚』¹⁰にて取り上げられるなど、『放浪息子』はセクシュアルマイノリティを描いた作品として多方面から評価されているのである。先述したように「性別越境」は必ずしもセクシュアルマイノリティと同義ではないが、二鳥のように複数のジェンダーを移行するキャラクターが十年に渡る長期的な連載期間のもとで描かれ、自他国でアニメ化がされ、なおかつ「セクシュアルマイノリティ」を描いたものとして評価されているということは、『放浪息子』を選定する意義を裏づけるだろう。

『放浪息子』における考察は三章にておこなうが、二章では作品分析に導入する観点を二つの作品をあげながら説明していく。その際取り上げる作品は、「性別越境」を扱っていることはもちろんだが、「性別越境」を描いた作品はその数が膨大なだけに、『放浪息子』に対応させて社会的評価を視野に入れて選定した。二章でとりあげる作品は『げんしけん二代目』¹¹と『もやしもん』¹²であるが、いずれも10巻を超える巻数を持ち、なおかつアニメ化がされたもので、作品内の「性別越境」の表現が社会的に受容されていると言える。その二作に関しては、全体のストーリーの説明は控え、分析の際に必要な部分だけ次章にて取り扱うこととする。それでは次章より「性別越境」に関する考察に入りたい。

第二章 分析方法の導入—「性別越境」を読み直す

1. 「越境者」と「観測者」の対置

本章では『放浪息子』を分析する前段階として、「性別越境」を分析する観点について説明する。これまで「性別越境」というモチーフはさまざまな視点で切り取られてきた。『ユリイカ』¹³の「特集：男の娘」では多くのマンガ作品における性別越境キャラクターが取り上げられ、そのキャラクターのジェンダー表現がどのような意味を持つのか、キャ

¹⁰ 原ミナ汰、土肥いつき編著『にじ色の本棚』、東京：三一書房、2016年。

¹¹ 木尾士目『げんしけん二代目』全8巻、講談社、2010-2016年。

¹² 石川雅之『もやしもん』全13巻、東京：講談、2004-2014年。

¹³ 「ユリイカ」第47巻第13号、東京：青土社、2015年。

ラクターはどのような表象であるのかなどが論じられた。岩下は『リボンの騎士』¹⁴におけるサファイヤの図像表現を記号的側面から分析し(形式的水準)、またサファイヤという性別越境キャラクターがどのような存在として描かれ、物語にどのような影響を与えるか(内容的水準)についても論じた¹⁵。このように「性別越境」はさまざまな観点から言及される。そのうえで、本稿は分析対象を「作品内で性別越境が行動として観測できる」マンガ作品とし、複数のジェンダーを経験するキャラクターの性別がマンガ作品中でどのように表現されるのかについて考察するのであるが、その際に注目したいのは、性別越境キャラクターの「図像」表現(形式的水準)ではなく、物語の内容(内容的水準)である¹⁶。作品のストーリーに焦点を当てることで「性別越境」の表現を読み込んでいきたい。では、具体的にどのような観点から分析を行うのか。それを特定の作品を挙げながら説明するのが本章の目的である。

性別越境キャラクターの性別を明らかにするために本稿で導入する観点は、「越境者」と「観測者」の対置である。ここでの「越境者」とは「性別越境」を行うキャラクター本人のことを指し、「観測者」とは性別越境キャラクターの越境のようすを観測している周囲のキャラクターのことだと定義する。

「越境者」と「観測者」の対置という観点は、マンガにおける性別の表現を「自己」と「他者」の関わりから論じるものである。なぜ「自己」と「他者」の関わり合いが「性別越境」を分析する際に必要かという点、「性別越境」というモチーフを表現する際、キャラクターの「ジェンダー表現」が重要な要素となるからである。というのも、本稿では「ジェンダー表現」というものは他者性を持っていると考えるのだが、その点で「自己」と「他者」の関わりに関する話の関係する。では、「ジェンダー表現」のもつ他者性について、以下に引用するバトラーの「自己」と「他者」の関係についての言説から整理をしたい。

承認のための欲求は、他者における反映を欲望が求めているということである。これは他者の他者性(私に似た構造を持つがために、結局はわたしの中に存在して、わたしの統一性を脅かすものだが)を否定しようとする欲望であり、また同時に、それは、自分自身がそうなることを恐れ、自分がそれにとらえられることを恐れているような、まさにその他者を自分が必要としているという苦境の中に見出される欲望なのである。

この強い結びつきに気が付かなければ、承認はあり得ない。人の意識は、他者の中で失われる。意識はそれ自身の外部からやってきて、それを何か別のものとして認識するか、むしろ他者の中に意識を見出す。したがって自己は他者の中で失われ、自分自身であって自分自身ではない他者性の中に—他者性によって—自分が取り込まれているのに気づくことから承認は始まる¹⁷。

上に引用した言説を「性別越境」に適用するなら、「人の意識」や「自己」というものは「性の自己認識(ジェンダーアイデンティティ)」に置き換えることができるだろう。それが「他者の中で失われ」、そして「他者性の中に取り込まれ」というのは、「他者」に相対した時、「性の自己意識」は「他者」からの観測の視点には直接影響を及ぼさないということだ。これはある意味もつともである。なぜなら、自身の内面は基本的に「他

¹⁴ 手塚治虫『リボンの騎士』、東京:講談社、1967-1997年。

¹⁵ 岩下朋世『少女マンガの表現機構』2013年、東京:NTT出版、94-103頁。

¹⁶ 同書において岩下は「形式的水準」と「内容的水準」の両方から『リボンの騎士』の「サファイヤ」を分析したが、その分析方法をここで引用する。

¹⁷ バトラー、ジュディス「哲学の「他者」は語るができるか」山口理恵子訳『現代思想』第34巻第12号(10月臨時増刊)、2006年、29頁。

者」に観測されないからだ。もしそれが観測されうるとすれば、内面のようにすがなんらかの手段で外面化されることが必要となる。「性の自己認識」に関して言うならば、それが「他者」から観測されるのは、何らかの方法をもって性別が表現されたとき、つまり「ジェンダー表現」がなされたときなのである。このように考えると、しばしばマンガにおいて「性別越境」がキャラクターのジェンダー表現によって描かれることは必然だと言える。具体的には服装であったり、しぐさや喋り方、または「言葉」による自身のセクシュアリティの表現などが、キャラクターによるジェンダー表現として典型的だろう。すると性別越境キャラクターの性別を分析する際にも、当然キャラクターのジェンダー表現に焦点があてられることとなる。事実、先に挙げた『ユリイカ』や岩下においても、キャラクターのジェンダー表現に関する分析は多く行われた。しかしここで一度、先述した「自己」と「他者」の言説に立ち返りたい。そこではジェンダー表現が「他者」を前提となされることを確認した。そのように考えると、性別越境キャラクターのジェンダー表現に焦点をあてるというのは、あくまで「越境者」の水準における分析であり、それは「自己」に関する事柄に終始してしまっているのではないだろうか。しかしながら実際、性別というものは社会との接合面に存在している¹⁸。つまりジェンダーをつくる要因となるものは、必然的に他者から観測されているものなのである。バトラーの言う「自己」と「他者」との間の「強い結びつき」とは、性別越境に言い換えると、「越境者」と「それを観測する者(観測者)」との間に存在する性別に関する認識の作用に他ならず、「他者」の観測を無くしてジェンダー表現は実行されない。そうであるにも関わらず、「越境者」のジェンダー表現を「他者」がどのように観測するのかという「観測者」の視点は語られることが少なかった。しかし繰り返すが、ジェンダー表現が「他者」を前提として行われる以上、それを観測する「他者」の視点を取り込むことは重要である。ゆえに本稿では「性別越境」というモチーフの分析に際して、「越境者」本人に関する分析だけでなく、「観測者」が「越境者」が表現する性別をどのように受容するかという観点を導入したい。そして「観測者」の視点に立脚した上で、性別越境が描かれる時、「越境者」と「観測者」はどのような関係性にあるのかということについて考察したい。それが冒頭で提唱した「越境者」と「観測者」の対置の本旨である。

2. 『げんしけん』『もやしもん』における「越境者」と「観測者」

「性別越境」というモチーフを扱うマンガ作品を「越境者」と「観測者」の関係性から分析した結果、ふたつのパターンがみられる。ひとつは、「観測者」の認識が「越境者」のジェンダー表現に従順である場合、そしてもうひとつは「越境者」と「観測者」に対応関係がない場合である。『げんしけん二代目』と『もやしもん』を例に挙げて、それを確認したい。

『げんしけん二代目』において、女装して大学のサークルに通う波戸賢二郎(以下「波戸」とする)は、サークルのメンバー矢島としばしば対立する。矢島は波戸の女性装に抵抗を示し、波戸に対して女性装をやめるよう説得する。しかしいざ波戸が男性装をすると、矢島は赤面して顔を向けられなくなる(矢島は男性に対した時にしばしば赤面して目を合わせられなくなる)。作品中では、矢島が波戸の性別を理解できずに葛藤するようすが描かれる。しかし「越境者」と「観測者」という関係性からみた時、人間関係として対立はあっても、波戸の性別に関する認識の水準では両者に対立はない。というのも矢島は、波戸が女性装をしているときには「女性装をしている男子」に抵抗感を示すが、男性装をする波戸には「男性」と認識して赤面するのであるから、すなわち矢島は波戸のジェンダー表現を受容し、その通りに波戸の性別を認識しているのである。つまり性別をどのように認識するかという水準では、矢島は波戸のジェンダー表現に従順だったと言える。反対

¹⁸ 東優子「性と発達」『発達心理学 穏やかで幸せな発達をめざして』松原達也編、2015年、東京:丸善出版、9-25頁。

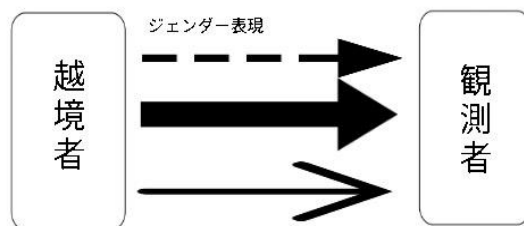
に、サークルにおける別のメンバーである吉武や先輩の大野は、波戸の女子装を面白がって肯定的にとらえている一方で、常に波戸のことは「男」だと認識していた。波戸はある男性の先輩に恋心を抱くようになるが、吉武は波戸が「男」であることを理由にその可能性を否定する。大野もまた、波戸が女性服に着替えるために女子トイレを使用することについて犯罪だと強く否定する。両者ともに、波戸の女性装については肯定的に受け止めておりながらも、あくまで波戸のことを「男」だと認識しているのである。二人は波戸のジェンダー表現に合わせて波戸への扱いを柔軟に変化させるが、個人の認識の水準では、波戸が「男」の枠を出ることはない。波戸も他の男子と同様に女子トイレは禁止であるし、波戸が男性に対して好意を抱くのは「同性愛」なのである。ここでは、波戸のジェンダー表現が、吉武と大野の認識の水準にはなんら影響をおよぼしていないことがわかる(たとえ人間関係に影響を与えていてもである)。これまで波戸と矢島・吉武・大野の四人が登場したが、ここで「越境者」と「観測者」としてその関係性を整理しよう。波戸のジェンダー表現は、矢島の波戸に対するジェンダー認識に大きく影響を与えたので、「越境者」と「観測者」には対応関係があったが、それは後者が前者に従順なものだった。しかし吉武と大野の認識は、波戸のジェンダー表現になんら影響を受けずに、波戸の性別に関してひとつの認識を変わず持ち続けた。ここでは「越境者」と「観測者」の関係に繋がりはなく、両者は解離している。このように「越境者」と「観測者」の関係について、ふたつのパターンが『げんしけん二代目』から発見できる。

選択的に男装/女装を使い分ける男子大学生のキャラクターとして『もやしもん』の結城蛍(以降「蛍」とする)がいるが、蛍の「性別越境」で描かれるのは、まさに「越境者」と「観測者」が解離しているパターンだった。「越境者」の水準で見た時、蛍は波戸と同様に、コミュニティによって能動的にジェンダー表現を変化させるキャラクターであるが、「観測者」の水準で蛍のジェンダーが新たにとらえ直される機会はなかった。蛍の幼馴染である沢木は、蛍の見た目について女性にしか見えないという評価をするものの、「見た目女でも男の友達とチューなんかするか！」¹⁹と蛍があくまでも「男」であることを強調した。他のキャラクターについても同様で、例えば同じゼミメンバーの及川は蛍のことを沢木の「彼女」だとからかうなど蛍の女性装に一定の理解を示すが、蛍のことはあくまで「男」だと認識していた。『もやしもん』における蛍の「性別越境」は、完全に「越境者」のジェンダー表現のみにおいて表現されており、「観測者」は「越境者」の影響を受けないものであった。

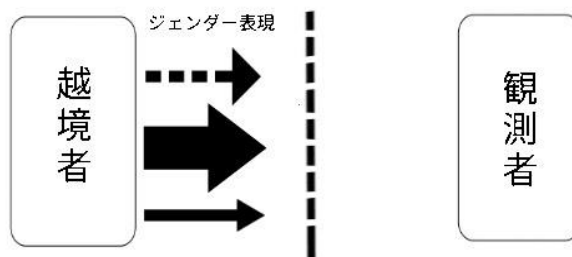
このように、「性別越境」を「越境者」と「観測者」の関係から分析した時、「観測者」の認識が「越境者」のジェンダー表現に従順である場合(図 A)と、「観測者」と「越境者」が解離している場合の二つのパターン(図 B)がとして見られた²⁰。

¹⁹ 石川雅之、前掲書、103頁。

²⁰ 図 A 及び B において「越境者」から伸びる複数の矢印は、「越境者」によるジェンダー表現を示す。ジェンダー表現には服装だけでなくさまざまな種類があり、なおかつそれは必ずしも男/女に区別できるものではない。またマンガ作品中でキャラクターのジェンダーは必ずしも極から極へと単純に移行するわけではなく、様々なジェンダー表現を繰り返すものである。形の違う複数の矢印は、そのようなジェンダー表現の多様性を担保している。

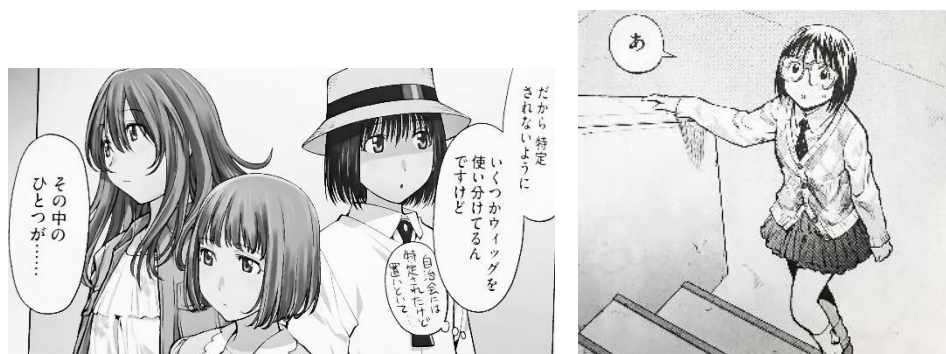


(図 A)



(図 B)

ここで共通しているのは、あくまで「性別越境」が「越境者」の水準で表現されていることである。多くの場合で「越境者」の性別を規定する要因となるのは「越境者」のジェンダー表現に他ならず、その水準で複数のジェンダーが表現された。『げんしけん』における波戸は、女性のサークルメンバーによって形成されるコミュニティへ参加するために女性装を始めたが、一方で男性コミュニティに参加するときには男性装をする。また大学の文化祭では、サークル外の人物に正体を隠すため、地味目の女装をした。このように波戸は自身のジェンダーの身体化に自覚的になり、選択的にジェンダー表現を多様に変化させるのである(図1)。



(図 1-1)²¹(図 1-2)²²目的に応じてジェンダー表現を変化させる波戸。

²¹ 木尾士目『げんしけん二代目』13巻、2012年、91頁。

²² 同書、121頁。

しかしそれを観測するキャラクターの水準では、「越境者」のジェンダーは一定の認識でしかない。吉武や大野のように「観測者」が影響を受けなかったパターン(図 B)では、「越境者」の性別に対する認識は「男」という一つしかなかった。『もやしもん』においても同様だ。「越境者」である蛍は男/女ふたつのパターンのジェンダー表現をしたが、それを観測する人物が蛍の性別の認識を変化させることはない(たとえ蛍の女性装に肯定的であったとしても)。また、「観測者」の認識が「越境者」のジェンダー表現に影響を受けた『げんしけん』における矢島のようなパターン(図 A)でも、その認識の変化はあくまで「越境者」に従順なものであり、「観測者」の視点で「越境者」の性別が捉え直されたと言えない。ここで留意したいのは、「従順」とは決して、「観測者」が何の葛藤もなく「越境者」の性別を認識するということではない。「観測者」が「越境者」に対峙したとき、葛藤や対立をする場合も当然あるだろう。しかしそれはあくまで人間関係におけるものであり、「越境者」が提示する性別を「観測者」がそのまま受容する限り、たとえそこに葛藤や対立があっても、認識の水準においては「観測者」は「越境者」に従順であると言える。

この二つのパターンにおいて、「越境者」と「観測者」の関係は相互に作用しあうものではなく、「越境者」によるジェンダー表現という一方向から「性別越境」が描かれていた。そのような意味で、「越境者」の性別を決定づける重要な要素となるものは、「越境者」自身による表現(「越境者」の水準による描写)であったと言える。そこでは、「観測者」が「越境者」の性別をどのように認識するかという視点は重要性をもって描かれておらず、「観測者」が消失していると言える²³。しかし先述したように、「他者」の観測を無くしてジェンダー表現は実行されない。ゆえに、「性別越境」を表現する時、「越境者」のジェンダー表現に対する「他者からの観測」は重要な要素である。それでは、「観測者」の視点で「越境者」のジェンダーがつけられていく「性別越境」のようすは、マンガ作品で描かれるのだろうか。その場合、「性別越境」はどのように表現されるのだろうか。それに対するひとつの視座を得られるのが、『放浪息子』である。『放浪息子』では「越境者」の性別が、「越境者」と「観測者」の関係性によって形づくられていく。次章ではこのことについて、具体的な箇所を挙げながら考察したい。

三章 『放浪息子』における「性別越境」の表現

『放浪息子』の主人公である二鳥修一は、「女の子になりたい男の子」²⁴であり、作中で描かれる小学五年生から高校を卒業するまでの間、二鳥はしばしば女性装を繰り返す。しかし普段は男子として生活を送っているため、常に女性のジェンダー表現をしているわけではない。二鳥はコミュニティや人間関係によって選択するジェンダー表現が違い、男/女どちらかのジェンダーに帰属する場合もあるし、男女の規範から逸脱する場合もある。二鳥は複合的なジェンダーを有していて、自ら選択的に多様なジェンダー表現をしているキャラクターだと言えるだろう。しかし二鳥の性別を明らかにするには、「越境者」としての二鳥のジェンダー表現を分析するだけではなく、それを観測した人物が、二鳥をどのような性別として捉えるのかに注目する必要がある。二鳥の越境を近い位置で観測してきた人物たちは、二鳥の性別をどのように認識しているのか。その認識にもし変化があったり、キャラクターによって差が生じることあるならば、そこに越境者二鳥の性別を解き明

²³ ふたつの図を参照されたい。図で示されたような関係性において、「観測者」による水準が「性別越境」の表現に大きな影響を与えているとは考えにくい。あくまで作品における「性別越境」の表現だけを見るならば、「観測者」の水準である右半分を隠したとしても、「越境者」の性別には大きな影響は与えられないことがわかる。これが「『観測者』の消失」という表現の意味するところである。

²⁴ 作者によるキャラクター紹介や作中の二鳥の発言で何度もそのように表現される。

かすヒントがあるはずである。そこで考察の対象とするのは、『放浪息子』に登場する高槻よしの、有賀誠、千葉さおり、末広安奈の四人である。それらのキャラクターは、いずれも小学校時代から二鳥と近い間柄で、二鳥の越境行為を幾度となく観測し、なおかつ「女の子になりたい」という二鳥のセクシュアリティを知る人物たちである。その四人に関して、二鳥の性別に対する認識やその変化が読み取れる個所を挙げながら、論考していくこととする。それによって二鳥のジェンダーがどのように表現されたか明らかにし、『放浪息子』における「越境者」と「観測者」の関係性を整理したい。

1. 高槻よしの・有賀誠の場合

高槻よしの(以下「高槻」とする)と有賀誠(以下「有賀」とする)の二人に共通しているのは、二鳥の性別に対する認識が最終的に「男」へと変化していく点である。まずは高槻における認識の変化について考察する。物語が始まる小学五年生の頃、二鳥のセクシュアリティをまだ知らない高槻は、二鳥のことを「男子」だと認識していた。それは、転校してきた二鳥が男子生徒として紹介され、なおかつ服装や髪型など男性的なジェンダー表現をしていたからだ(図 2)。美容院で二鳥と同じくらいの長さまで髪を切ったときに、高槻が二鳥に対して「男同士に見えるかな」(図 3)と発言している場面にもそれがあらわれている。



(図 2)²⁵転校してきた二鳥

(図 3)²⁶高槻(左)と二鳥(右)

しかし高槻は規範的なジェンダー観を有しておらず、二鳥に「男らしさ」を求めない。二鳥が高槻の家を訪れた時、高槻は自身の持ち物であるワンピースに反応する二鳥に対して「二鳥くんが着たらいいよ」²⁷と勧める。その発言は決して冗談ではなく、高槻は「男子」である二鳥がワンピースを着ることに対して何の抵抗もなかったのである。また二鳥

²⁵ 志村貴子『放浪息子』1巻、13頁。

²⁶ 同書、88頁。

²⁷ 同書、21頁。

の見た目に関しては、「(ワンピースが)似合うし」²⁸や「二鳥くんのほうが女の子にみえるかもよ」²⁹という評価をしていた。このように、はじめの高槻には二鳥に対して「女性的な外見を持つ『男子』」という認識があったと言える。しかしその段階で高槻は、未だ二鳥による女性的なジェンダー表現を観測していなかった。そこから二鳥によるカミングアウトをきっかけに、高槻の二鳥に対する認識は変化していく。高槻自身が「男の子になりたい」³⁰という気持ちを持っているせいもあって、二鳥に自分と似たものを感じた高槻は、二鳥が「女の子になりたい人」ではないかと気づき、直接そう問いかける³¹。それを期に二鳥は高槻にカミングアウト(ジェンダーの表現)をするのであった。

そのカミングアウトによって、二鳥を「女の子になりたい人」だと知った高槻は、二鳥のことを「男子」として認識しなくなる。それは二人で共に外出した際、女性服に着替える二鳥を女子トイレに呼び込むところや、二鳥の隣の個室で用を足すところ、また、その時生理になった高槻が二鳥に生理用品を買いに行かせるところによく表れている³²。この時の高槻は二鳥を「男」というジェンダーから完全に切り離して捉えているのである。もちろんカミングアウト前の二鳥に対してもワンピースの着用を勧めてはいたが、それは二鳥に対する認識の如何ではなく、あくまで高槻のジェンダーフリーな感覚によるものだった。しかしカミングアウト後に、高槻が「女子トイレ」や「生理」という女性にしか認められない文脈に二鳥を組み込んでいく行為は、明らかに以前の二鳥に対するジェンダー認識とは異なるものである。ゆえに高槻による二鳥に対するジェンダー認識は、二鳥からカミングアウトを受ける前と比べて変化したと言える。ただ、高槻は二鳥を「男」というジェンダーから切り離して捉えたものの、女性だと認識していたどうかは明らかにならない。というのも、二鳥は高槻に対して「ぼくは高槻さんのことを男の子だと思ってる」と伝える³³ものの、高槻が二鳥を「女の子」だと直接表現するようなシーンはなかったのである。しかしながら、二鳥のセクシュアリティを全面的に肯定している点や、高槻自身が男女二元的な規範を有していない³⁴こと、また、先に述べたように二鳥を男性から切り離して捉えていることを鑑みると、高槻は二鳥を「二鳥くん」という固有の存在として認識していたと言える。それは、女性装をしつつも「ぼく」という一人称を使用する二鳥に対して、高槻が小気味よく思う場面にも読み取れる(図4)。二鳥は「女の子になりたい」ものの、一人称が「ぼく」であるし、女性に恋愛感情を抱くなど、決して規範的な女性ジェンダーを体現しているわけではない。しかし高槻はそれらのような二鳥による表現を男/女のどちらかに帰属されて捉えるのではなく、「二鳥くん」という個人の性表現として肯定していた。高槻が二鳥の「ぼく」という一人称に感じた小気味良さは、そのような二鳥に対する認識の表れであろう。そして、二鳥の性表現を「男子/女子」としてではなく、その人個人として認識するというのは、自身の性に違和感を抱く高槻にとって、自然なことであったとも考えられる。

しかし成長するにつれ、高槻はしだいに二鳥を「男」だと認識するようになる。それは高槻の性的指向によって表現される。二鳥は高校生になると身体の男性化が進み、女性装をしている状態であるにも関わらず男性だとバレてしまうようになる(図4-5)。

²⁸ 同書、22頁。

²⁹ 同書、66頁。

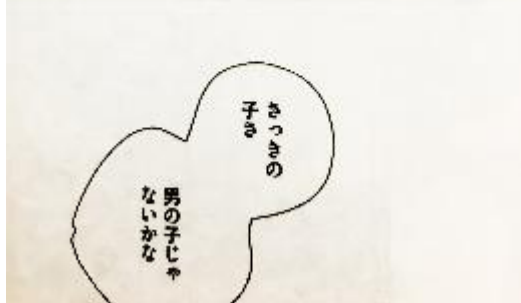
³⁰ 同書、119頁。

³¹ 同書、137頁。

³² 同書、144-147頁。

³³ 同書、6巻、17頁。

³⁴ そのためこの段階の高槻が、二鳥に対して「男子」「女子」という二元的で単純な見方をするとは考えにくい。



(図 4)³⁵二鳥と高槻

(図

5)³⁶高校生の二鳥

そんな二鳥に高槻は男性性を感じ、恋愛感情を抱くようになる。電話の向こうから聞こえる二鳥の声に「男の人の声」³⁷と赤面するシーンからは、高槻が二鳥に恋愛感情を抱いていることだけではなく、二鳥の「男性性」に惹かれていることがわかる。もちろん高槻は、二鳥のことが「女の子になりたい人」であることを理解し、それを肯定している。しかし認識の水準では、高槻は二鳥を「男性」だと認識するようになってしまう。それは二鳥が二次性徴を経験して身体が男性化することだけではなく、ジェンダーフリーだった高槻が徐々に規範的なジェンダー観を持つようになってくることも関係している。二鳥の身体的な変化と、成長に伴う二鳥との関係性の変化、また高槻自身の特性の変化、さまざまな要因によって高槻の二鳥に対する認識は「男」へと変化していったのである。この点、恋愛感情という描写の仕方は、高槻の二鳥に対する理解(高槻が二鳥のセクシュアリティを理解していること)と、認識の水準(二鳥を男性として性愛の対象にすること)の区別を効果的に表現していると言える。

このように高槻は、①二鳥のセクシュアリティを知るまではいち男子生徒として認識し(小学五年生時)、②セクシュアリティを知ってからは男子から切り離し、「二鳥くん」という固有の存在として捉えた(小学五年生から高校生になるまで)。そして③高校生になった二鳥に対しては「男の人」だと認識して恋愛感情を抱くようになる。この高槻の認識の越境は、二鳥のジェンダー表現にある意味では対応している。というのも、①の時期において二鳥は女性的なジェンダー表現を高槻にみせていなかった。しかし「女の子になりたい」という二鳥のカミングアウト(セクシュアリティを他者に表現しているという意味ではカミングアウトもジェンダー表現だと言えよう)を経て、②のように二鳥を男性から異化して捉えた。しかし二次性徴によって男性的な外見の特徴を備えた二鳥に対しては、今までと違って男と認識するようになる。実際高校生になると、二鳥は高槻の前で女のジェンダー表現をすることがほとんどなくなったし、高槻に「女の子になりたい」と伝えることもなくなっていた。高槻の二鳥に対する認識は、結果的にみると、おおよそ二鳥のジェンダー表現に対応していたと言える。しかしそれはあくまで結果論である。高槻は二鳥のジェンダー表現によって二鳥の性別を認識していたのではなく、あくまで高槻個人の特性の中でそれを捉え直していた。②の時期に二鳥を個人のジェンダーとして認識したのも、その背後に

³⁵ 『放浪息子』、7巻、96頁。

³⁶ 同書、15巻、35頁。

³⁷ 同書、12巻、103-104頁。

は当時高槻がジェンダーフリー的な感覚を持っていて、なおかつ高槻自身も「男の子になりたい」想いを抱えていたことが関係している。また、③の時期に二鳥を「男性」だと認識するようになるのには、高槻がジェンダーに対して徐々に規範的な存在になっていき、「男の子になりたい」想いをなくしていくことが影響している³⁸。二鳥の性別に対する認識には、高槻自身の特性も大きく関与していたのである。

高槻のほかに、徐々に二鳥に男性性を見出すようなる主要キャラクターがもう一人いる。二鳥と同様に、「女の子になりたい」という気持ちをもっている有賀誠(以下有賀とする)である。有賀が二鳥と親しくなったのは、不可抗力的に二鳥のセクシュアリティを知ったことがきっかけだった。有賀は二鳥と同じ悩みを共有する親友でありつつ、自分より見た目に恵まれた二鳥に対して嫉妬の気持ちを持っている。「自分の方がかわいいと思って」³⁹、「君はとんだ悪女だ」⁴⁰、「ぼくよりずっと似合うくせに」⁴¹と憎まれ口をきく描写や、中学校の文化祭で倒錯劇(男女が逆転して役を演じる劇)を演じた時も、二鳥ではなく自分が主役に選ばれてしまったことに引け目を感じる。有賀の嫉妬やコンプレックスは、女性ジェンダーを身にまとうことに関するものであり、それはつまり二鳥の女性のジェンダー表現に対する嫉妬である。「女の子になりたい」自分自身と同列視して嫉妬するというのは、有賀は二鳥を自分と同じジェンダーだと認識しているからである。二鳥と共にたびたび女性装を繰り返すことや、声変りする前の声を記録に残すために一緒にボイスレコーダーで録音をする⁴²ことから、有賀は二鳥のジェンダーを自分と同じジェンダーを有している者だと認識しているようすがわかる。

しかし有賀も高槻と同様、二鳥を「男性」として認識したうえで恋愛感情を抱くようになる。有賀の恋愛対象は男性であるのだが⁴³、そんな有賀が二鳥に好意を寄せるのは中学二年の頃のことである。有賀は二鳥から強い口調で「マコちゃんはかわいいよ」⁴⁴と言われたことに対してかっこよさを感じ、後日二人で外出した際には「彼女気分デート」⁴⁵したという。有賀が高槻と違うのは、二鳥の外見が男性的になる前の段階で二鳥に好意を寄せるところである。しかしその後有賀は二鳥の外見の男性性にも惹かれるようになり、髪を短くした二鳥に対して赤面したり、身体つきががっちりしてきた二鳥にかっこよさを感じる。それを二鳥自身も自覚していて、有賀からの好意に関して「親友はぼくに男を感じているようだった」⁴⁶と表現する。

このように、高槻と有賀は、二鳥のことを徐々に「男」として認識していくようになる。しかし高槻と有賀の観測の変化は、二鳥のジェンダー表現に影響を受けてはいるが、決してそれだけが要因ではなかった。二鳥の内面や身体、ジェンダー表現のささいな変化、また高槻や有賀自身の特性、二鳥との関係性など、複合的な要因において二鳥に対する認識を変化させていったのである。

2. 千葉さおりの場合

千葉さおり(以下「千葉」とする)は高槻や有賀と同じく、二鳥の越境行為を間近で観察

³⁸ 高槻は最終的に性別違和をなくし、女性ジェンダーを受け入れるられるようになる。また性別違和を抱いていた時期にはなかった男性に対する恋愛感情を知る。高槻の中にある男女の粹組みは確実に色濃くなっていくのである。

³⁹ 『放浪息子』、3巻、106頁。

⁴⁰ 同書、111頁。

⁴¹ 同書、5巻、141頁。

⁴² 単行本、5巻、139頁。

⁴³ 単行本、5巻、66項。

⁴⁴ 単行本、10巻、10-11項

⁴⁵ 単行本、10巻、107頁。

⁴⁶ 単行本、15巻、86頁。

してきた人物であるが、彼女の二鳥に対するジェンダー認識は、他の二人とは違った。千葉は二鳥のことを「特別(な男の子)」⁴⁷と称するように、千葉は自身の中にある男のジェンダー規範を逸脱した存在として二鳥を認識していたのである。「女はたいてい陰険で陰湿で 男は乱暴と馬鹿ばかり 誰も全然すきじゃなかった」⁴⁸という内面描写でも描かれるように、千葉は男女の性別に対して強固な規範を持っており、なおかつそれを嫌悪していた。千葉の中では乱暴で馬鹿なのが「男」の像であり、陰険で陰湿なのが「女」の像だったのである。高槻や二鳥と親しくなったのも、千葉のそのような特性によるものだ。高槻はクラスでも「高槻くん」と呼ばれるなど規範的な女らしさとは無縁の存在であり、千葉の持つ強固なジェンダー規範から逸脱した「女らしくない」女子生徒だったのである。そして千葉の持つジェンダー規範を逸脱する存在として、彼女にとって最も印象的だったのが二鳥だった。千葉は二鳥の「かわいい」外見や、「やさしい」「おしとやか」な性格に惹かれた。そして二鳥に女性服やヘアバンドをプレゼントするなど、ことあるごとに女性のジェンダー表現をするように誘導する。それはまさに千葉が二鳥を「男」のジェンダーから逸脱して捉え、また二鳥にそうあることを望んでいたことを示すものである。ゆえに千葉にとって二鳥は、男ジェンダーを逸脱したという意味で「特別な男の子」だったのである。その認識は、中学生になって男子制服を着用し、制度的に男子に組み込まれていく二鳥を見ても変わらなかった。

しかし千葉は徐々に二鳥が「特別な男の子」ではないことに気づいていく。そのきっかけは、二鳥の二次性徴だった。中学三年生になり、髪を短く切った二鳥に対して千葉は「かわいいけど男の子みたい 別にこれまでだってふつうの男の子だったんだわ でも二鳥くんは特別なんだと思ってた これからどんどん男の人になっていくんだ二鳥くんも」(図 6)という感想を抱く。二鳥の二次性徴を通じて、千葉は二鳥が自分の思っていたような「特別な男の子」だったわけではないことを自覚する。千葉はそれまで二鳥を神格化して捉えていて、自身の願望(自身の嫌悪する規範的な男女から逸脱)を二鳥に見出していたが、ここでそれが幻想であったことに気付くのである。このように、千葉における二鳥のジェンダーに対する認識は、ずっと典型的な「男子」とは違う「特別な男の子」であり、神格化されたものだった。しかし二次性徴を通じて、二鳥が「普通の男の子」だったことに気づく。それは二鳥の性別に対する気づきというだけでなく、千葉の中にある規範的な性別の認識の崩壊、そしてそれと同時に、性というものに対する理解の表れでもあっただろう。これまで千葉は男女の性別を固定的に認識しており、規範的な男女の特徴を嫌悪していた。ゆえにそれから逸脱している二鳥は「特別な男の子」であり、千葉にとって神格化されたものだった。しかし二鳥の二次性徴は、千葉にそれが思い違いであったことを知らしめた。二鳥もまた「ふつうの男の子」であり、男のジェンダーというものが、自身が今まで認識していたような(嫌悪するまでの)固定的なものではないことを理解したのである。

⁴⁷ 単行本、11 巻、54 頁。

⁴⁸ 単行本、13 巻、17-18 頁。



(図 6-1)⁴⁹ 千葉(左)と二鳥(右) (図 6-2)

いずれにせよ千葉の認識の変化もまた、高槻や有賀と同じく、二鳥の越境行為そのものとは異なる要素によるものであった。しかし千葉の場合は、あくまで自身の中の「男子」というジェンダーを基調にした上で二鳥の性別を理解していたので、他の二人のような認識の大幅な変化はみられない。なおかつ千葉による認識の変化は、二鳥のジェンダーに関する認識の変化というより、「性」そのものに対する認識の変化であり、「性」への理解なのである。ゆえに千葉は、二鳥の身近にいる人物で唯一、二鳥に対する性の認識の越境を観測できなかった人物だと言える。しかし述べたように、千葉の中で二鳥に対するジェンダー認識が全く変化しなかったわけではない。千葉は千葉の水準で、小さな変化を伴いながら二鳥の性別を認識し、理解していたのである。

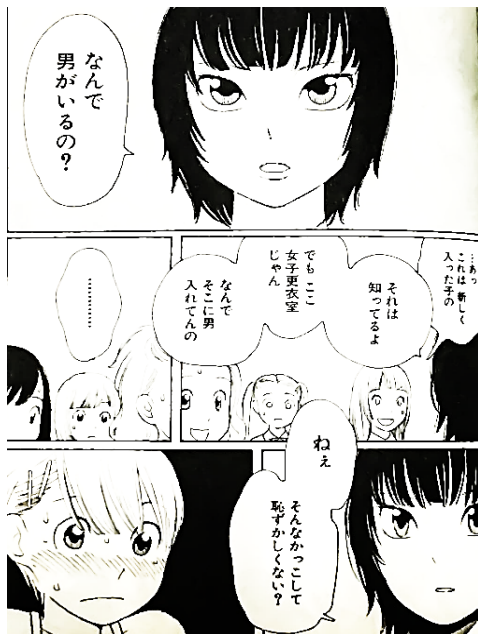
3. 末広安奈の場合

最後に、二鳥のパートナーである末広安奈(以下「安奈」とする)について考察する。安奈の二鳥に対する観測は、これまで取り上げた登場人物とはまるで異なった。安奈が二鳥と初めて出会うのは、二鳥が小学六年生の頃で、場所はモデル事務所の女子更衣室だった。二鳥は姉の真穂の計らいでモデル事務所のオーディションをうけ、女装が似合うことをアピールして合格していた。ゆえに女子更衣室を使用しても問題化されなかったのである。その時二鳥は更衣室で、他の女子モデル達から面白がって女性服を着させられていた⁵⁰。そのように二鳥の女装に関して寛容な空間の中で安奈と二鳥は出会うのだが、その時安奈は「なんで男がいるの?」と注意し、女装した状態の二鳥を変態扱いする⁵¹。安奈にとって二鳥は「男」だったのである(図 7)。

⁴⁹ 『放浪息子』、11巻、53-54頁。

⁵⁰ 同書、3巻、161頁。

⁵¹ 『放浪息子』、3巻、161-172頁。



(図 7)⁵² 初対面の二鳥と安奈。



二鳥は徐々に安奈に好意を抱くようになり、中学一年生のころ安奈に告白する。それから安奈と交際することになるのだが、二鳥は彼女の前で女装することを自重していた。二鳥は自身がアブノーマルであると自覚していたので、それを控えることで、規範的な異性愛カップルとして交際しようと試みたからである。しかし二鳥が「女の子のかっこうするのが好きです」⁵³とカミングアウトした際、安奈はそれに動じず、「面白いね」「変なやつ あんたってかわいい妹みたい」⁵⁴と好意的に受け取る。それから女性装をした状態の二鳥ともデートをするようになり、安奈は二鳥のセクシュアリティを理解しているようにも思えた。しかし、二鳥が中学二年生のころにセーラー服で登校したことがきっかけで、安奈の認識に大きな変化があらわれる。それまで安奈は二鳥の女性装を肯定し、「かわいい妹みたい」と感じていつも、本心では二鳥に男らしいイメージを持っていたという。それは二鳥が安奈に告白する際、物おじせず自分の気持ちを伝えたことによるものだった。安奈は二鳥に対して持っていた認識として、以下のように語る。

男らしいシュウ(二鳥)のイメージがあたしにあって 外見は女の子っぽいけどぜんぜんそんなことないっていうか だからセーラー服着てさ 学校に行ったら聞いたとき わかんなくなっちゃったの 自分のイメージとずれちゃったの⁵⁵

安奈ははじめ二鳥のことを男だと認識していたし、交際を始めてからも二鳥のことはあくまで「彼氏」だと思っていたのである。その上で二鳥の女性装を容認していた。すなわち二鳥の女性装は、安奈による二鳥のジェンダー認識に大きな影響を与えていなかったと言える。これは二章にて(図 B)で示したパターンである。『げんしけん二代目』における吉武や大野、また『もやしもん』の登場人物に見られた構図である。この段階での安奈はまさにそのパターンだと言えるだろう。しかし二鳥のセーラー服登校事件を契機に、これまで深く考えることはなかった二鳥のセクシュアリティに対して向き合うことを余儀なく

⁵² 同書、162-163頁。

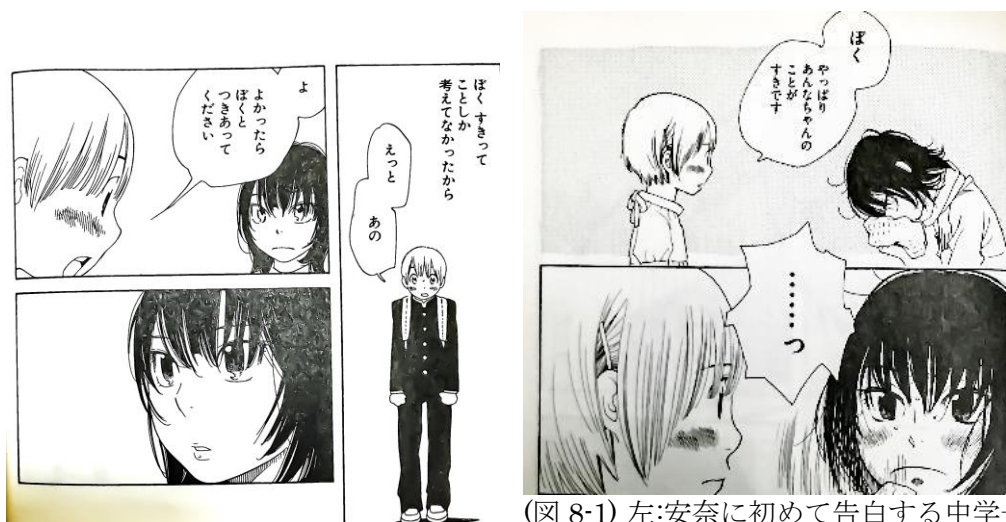
⁵³ 同書、8巻、42頁。

⁵⁴ 同書、8巻、44-45頁。

⁵⁵ 同書、10巻、197頁。

され、安奈は戸惑いを感じたのだ。その時安奈は「彼氏むりでも友達にならなれるよ シュウは弟みたいで てゆうか妹みたいにかわいいんだもん あたしたち友達になろう 本当にシュウが女の人になりたいなら きっといろいろちゃんと調べなきゃいけないことがあるよ」⁵⁶と二鳥に伝える。この描写から安奈は、二鳥のジェンダー表現(女性装)が単なる趣味ではなく、二鳥のセクシュアリティに関わる重要なものであることを認識したことがわかる。それと同時に、安奈がそれまでの二鳥に対して「かわいい妹」等の表現をしつつ、その実あくまでジェンダーに規範的な観点から「彼氏」と認識していたことも明らかになるのである。

安奈と二鳥が再び交際したのは、二鳥が再び告白をしたことがきっかけだった。この時二鳥は安奈にはっきりと好意を伝えるのだが、その姿は安奈がかつて「男らしい」と感じた、初めに告白したときの二鳥と同じであった(図8)。



(図 8-1) 左:安奈に初めて告白する中学一年生時の

二鳥⁵⁷

(図 8-2) 右:安奈に再び告白する中学二年生の二鳥⁵⁸

二度目の告白をする時、二鳥は学校で文化祭の劇のために女性装をしていた。安奈が二鳥をそれまでと同じように「彼氏」と認識できなくなった原因は、二鳥が女装して学校に登校したことであるが、二人が復縁する場面で女性装をした二鳥が登場するのである。これは二鳥の女性装(二鳥のジェンダー表現)が単なる「趣味」ではなく、二鳥にとって重要なものであるということを安奈が認識し、それを受け入れたことが表現されている。パートナーとしての二鳥の性に対する認識がそれまでと比べて変化し、より深くとらえ直したことが明示的に示されている。ゆえに、その後も二鳥はしばしば「彼氏」と表現されるが、それはいままでの「彼氏」とは違った意味合いなのであることは明白だ。

それではその後の二鳥は、どのような「彼氏」なのであろうか。復縁した後に二鳥に対して使われる「彼氏」は、以前の「彼氏」とは違い、二鳥の性別に対する多元的な見方を内包している。入学する高校を迷っている受験生の二鳥に対して安奈は「あんたが女の子だったらなー うちの高校すすめられるんだけど」⁵⁹「男子高なんか行っちゃったらつまらないよ絶対」⁶⁰と言いながら、自身の通う女子高の制服を着せようとする。にもかかわ

⁵⁶ 『放浪息子』、10巻、14-15頁。

⁵⁷ 同書、7巻、78頁。

⁵⁸ 同書、10巻、199頁。

⁵⁹ 同書、11巻、117頁。

⁶⁰ 同書、118頁。

らず、女子制服に着替えようとする二鳥を見て「バカじゃないのあたし なんて年下の男連れ込んで服脱がさせてんの!？」とハッとしたり、「シュウは妹感覚ってうか 同性ノリってうか 女湯的な」と混乱する⁶¹。安奈は二鳥の性別を男か女、またはそれ以外というように、何か一つのものとして捉え方をしていないことがわかる。二鳥をある部分では女子的に認識しつつも、一方で男子だとも認識していて、しかしもちろん規範的な男性だとは思っておらず「女の子のかっこうをしたい」二鳥の気持ちも理解しているという、様々な性別の認識が入り混じっている状態だ⁶²。一見複雑なように見えるが、性を規定する要因は複合的なもの⁶³であるので、「越境者」二鳥に対してパートナーの安奈がこのように複合的な認識をもつことは自然なことだと言える。

それ以降の安奈と二鳥の関係性には身体的接触が介在する。二鳥の外見の男性的な成長を「かわいそうなのにな ちょっとかっこよくてどきどきする」⁶⁴と思う安奈は、二鳥に性的な欲求を感じるようになる。同じく二鳥も安奈に欲情し、二人は徐々に身体的な接触を持つようになる。そのようにしてパートナーとしての関係が深まっていくが、その中でも、安奈は継続して二鳥の女性装を肯定する。さて、ここで重要なのは、二鳥の身体の男性化を通じて、安奈の認識はどうなったかである。なぜなら二鳥の身体の男性化は、高槻が二鳥を男だと認識するようになったきっかけでもあり、千葉の認識においても変化を与えたものであるからだ。すなわち、二鳥の二次性徴(身体の男性化)は重要な観測点なのである。安奈の認識が読み取れるのは、二鳥が今後女性に見えなくなる現実に対し、安奈が発言した内容である。それは「それなら女装おじさんとデートする変なおばさんでいいよもう」⁶⁵というものだった。安奈は二鳥のセクシュアリティを理解したうえで将来的にも交際を続ける意思をみせる。加えてここで重要なのは、二鳥と交際することが自身のセクシュアリティにも影響を及ぼすことを安奈は自覚し、当事者性を獲得する点である。もともとセクシュアルマジョリティだった安奈が当事者性を獲得するというのは、二鳥との関係性によって安奈のセクシュアリティが変化していったということを示している。それはすなわち、安奈による二鳥のジェンダー認識の変化でもある。当事者性を獲得したこの時点での安奈の二鳥に対する認識もまた、以前とは違う種類のものだろう。そして、安奈による二鳥のジェンダー認識の最終的な変化もまた、安奈の当事者性によって表現される。安奈は「女装おじさんとデートする変なおばさん」という当事者性を有したが、ここからまたそれが大きな変化を見せるのである。それは、二鳥が私小説を安奈に読ませたことがきっかけだった。二鳥自身はその小説を「私小説風のフィクション」⁶⁶と称するが、内容は二鳥の心情描写のようなものだった。安奈はそれを読むと、二鳥の自死を心配し、涙を流しながら二鳥と抱き合う。その時二鳥は抱き合いながら「ぼく、女の人になりたい」と安奈に告げる。それに対し安奈が返した言葉は、「その場合わたしはレズビアンってことになるのかな」というものだった(図9)。

⁶¹ 同書、120-122頁。

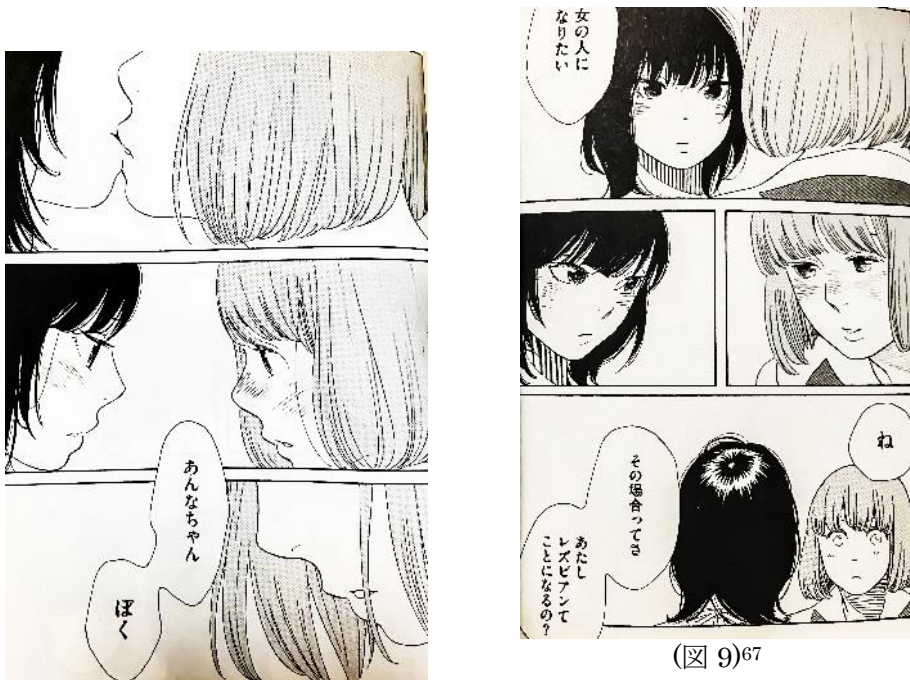
⁶² この点、高槻が「二鳥くん」という個人のジェンダーとして認識していたのとは異なっている。

⁶³ 二章で述べた内容である。

⁶⁴ 『放浪息子』、12巻、110頁。

⁶⁵ 同書、15巻、32頁。

⁶⁶ 同書、88頁。



(図 9)⁶⁷

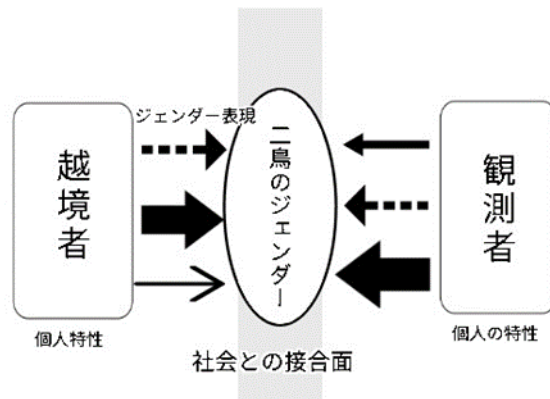
自身を「レズビアン」と自認するという事は、「女装おじさんとデートする変なおばさん」という当事者性が意味するものとは大きく異なる。安奈による「レズビアン」の自認は、二鳥の性別がこの時はっきり「女性」だと認識されたことを意味しているのである。

このように安奈は、はじめは小学生の二鳥を「男」、一度目の告白を受けてからは「かわいい妹みたい」な「彼氏」、一度別れを経てからは二鳥の性別の在り方を深く理解した上で複合的な見方をし、最終的には「女」だと認識するようになるのである。ここで特筆したいのは、二鳥は以前から安奈に「女の子になりたい」という自身の気持ちを何度も伝えていたし、安奈は二鳥の越境行為を何度も観測していたことである。それにも関わらず安奈の二鳥に対する認識は常に変化し、最終的に二鳥は「女性」だと認識されるに至る。この認識の変化は、決して二鳥のジェンダー表現だけによるものではない。安奈と二鳥の関係性の変化や、安奈の特性の変化など、複合的な要因のもとで二鳥のジェンダーは形造られていったのである。

4. 『放浪息子』における「越境者」と「観測者」

これまで二鳥の越境を近くで観測した人物を四人挙げたが、四人とも二鳥の性別に関して異なった認識を持っていた(高槻と有賀の認識の変化は類似していたが、そのきっかけや時期は違っていた)。しかしながら四人とも、二鳥の越境行為を同時期に同じように観測してきた人物達なのである。その中でこのように大きな個人差が認められるということは、二鳥のジェンダーが構築されていく要因として、二鳥のジェンダー表現以外の要素が複雑に関係しているということである。それはすなわち、観測する個人の特性や、二鳥との関係性である。『放浪息子』において「越境者」二鳥の性別は、「越境者」の水準だけでなく、「観測者」の水準の影響も受けながら表現された。つまり、ジェンダー表現や性の自己認識のような「越境者」の水準に終始することなく、それが社会との接合面の間においてどのように作用し、観測され、解釈されるかという文脈において性別が表現されているのである(図 C)。

⁶⁷ 同書、195-196 頁。



(図 C) 二鳥のジェンダーが構築されるようす

それでは、二鳥の性別がどのように表現されているかが明らかになったところで、『放浪息子』における「性別越境」とはつまりどのように表現されたのかについてまとめた。つまるところ、『放浪息子』における「性別越境」の表現として重要な役割を果たしたのは、「観測者」の水準であった。高槻と有賀は、徐々に二鳥を男性としてみなすようになる。千葉に関しては「特別な男の子」という認識から大きな変化はみられなかった。安奈は、高槻・有賀とは正反対に、はじめ抱いていた「男」という認識が、段階を経て最後には「女」に変化していく。つまり最終的に、二鳥の望む性別の在り方と二鳥に対するジェンダー認識が一致したのは、パートナーである安奈だけだった。二鳥は安奈との関係性の中で、望む性別を獲得したのである。しかしそのような安奈の認識が効果的に表現されるのは、あくまで高槻・有賀・千葉という「観測者」が存在したからである。すなわち、他の人物との対比があってこそ、それらとは違った安奈の二鳥に対する認識が強調されたのである。ゆえに二鳥の「性別越境」は、高槻・有賀・千葉・安奈の「観測者」の水準で表現されたと言える。

このように、『放浪息子』における「越境者」のジェンダー表現に、「観測者」の認識は従順ではない。二鳥のジェンダー表現が影響を与えながらも、「観測者」達はそれに従わず、それぞれの内面におけるジェンダー規範や自己認識など個人の特性をもって二鳥のジェンダーを認識し、解釈する。「観測者」の水準が語られ得なかった二章における「性別越境」とは全く異なり、『放浪息子』では「越境者」と「観測者」が対立関係にあり、どちらか一方に因ることはない、相互的作用のもとで「越境者」二鳥のジェンダーが構築されていくのである。また『放浪息子』において、「越境者」の性別を決定づける重要な要素となったものは、「観測者」の視点(「観測者」の水準による描写)であった。この点においても、二章で示した「越境者」の水準で表現される「性別越境」とは異なっているのである。

結論

マンガ作品における「性別越境」を、「越境者」と「観測者」の関係性という視点から論じてきた。『げんしけん二代目』『もやしもん』における両者の関係には二つのパターンが発見された。それは「越境者」のジェンダー表現に「観測者」の認識が従順だった場合と、「越境者」と「観測者」が解離していた場合である。その点において、それらの作品における「性別越境」は「越境者」の水準で表現されていたと言える。しかし『放浪息子』における両者の関係は違った。「越境者」と「観測者」は対立関係にあり、両者の関係によって「越境者」の性別が形づくられた。「自己」と「他者」との関係性において性別が獲得されていくようすが詳細に描かれた『放浪息子』は、「自己」の水準に終始する

傾向にあった「性別越境」のマンガ的表現に、ひとつの視座を与えたのではないだろうか。マンガにおける「性別」の表現は多様性があり、それだけに複雑である。本稿の「性別越境」に関する考察が、「性別越境」を超えて、マンガにおける「性別」の表現そのものに対して、ひとつの見方を提示することができたなら幸いである。

またこれまで述べたように、本稿ではキャラクターの関係性から「性別越境」の表現について考察したが、社会には個人のレベル以外にも「性を規定する複合的な要因」が存在する。それについて東の論を以下に引用する。

性(セクシュアリティ)のありようを理解する上で重要なのは、セクシュアリティの定義に登場する「諸要素の相互作用」である。個人はそれ単体で存在しているのではなく、家族・パートナー・友人などとの関係性の中に置かれている(ミクロ・レベル)。こうした個人や家族が生活する地域社会には、学校や職場、あるいは宗教的コミュニティなどが存在している(メゾ・レベル)。それはまた、特定の文化的・社会的・経済的状况にある社会に取り込まれており(マクロ・レベル)、そこで今日共有される規範や価値観、道徳観から個人は自由ではありえない。⁶⁸

この言説からわかるように、性別が規定されるステージには「ミクロ・レベル」「メゾ・レベル」「マクロ・レベル」の三層構造があるが、本稿における「性別越境」の分析は、「ミクロ・レベル」の社会との接合である。性別越境キャラクターとそれを観測する他キャラクターとの間の関係性に焦点をあてて「性別越境」を考察する本稿の試みでは、「メゾ・レベル」「マクロ・レベル」において規定される性別に関しては言及し得なかった。その点についての考察は今後のマンガ研究に期待したい。最後に付け加えたいのは、本稿は様々な表現の可能性がある「性別越境」を、「越境者」と「観測者」の視点から切り取ったに過ぎないということである。ここで言及されていない観点も交えた多角的な視点から「性別越境」が分析されることが望まれる。

参考文献一覧

第一次資料

- ・石川雅之『もやしもん』全13巻、東京:講談社、2004-2014年。
- ・江口寿史『ストップ!!ひばりくん!』全四巻、東京:集英社、1981-1983年。
- ・木尾士目『げんしけん二代目』全8巻、講談社、2010-2016年。
- ・志村貴子『放浪息子』全15巻、東京:エンターブレイン、2002-2013年。

⁶⁸ 東優子「性と発達」『発達心理学 穏やかで幸せな発達をめざして』松原達也編、2015年、東京:丸善出版、14頁。

- ・志村貴子『ぼくは、おんなのこ』、東京:エンターブレイン、2004年。
- ・高橋留美子『らんま 1/2』全38巻、東京:小学館、1987-1996年。
- ・手塚治『リボンの騎士』全、東京:講談社、1963-1966年。
- ・富樫義博『HUNTER×HUNTER』全34巻、東京:集英社、1998-2018年。

第二次資料

- ・岩下朋世『少女マンガの表現機構』東京:NTT出版、2013年。
- ・東優子「性と発達」『発達心理学 穏やかで幸せな発達をめざして』松原達也編、東京:丸善出版、2015年。
- ・斎藤宣彦「マンガの構造モデル」『別冊宝島 EX マンガの読み方』東京:宝島社、1995年。
- ・志村貴子「魔法が生まれる瞬間 志村貴子という DNA の描く螺旋」『ユリイカ』第49巻第20号(11月臨時増刊)、東京:青土社、2017年。
- ・バトラー、ジュディス「哲学の「他者」は語ることができるか」山口理恵子訳『現代思想』第34巻第12号(10月臨時増刊)、2006年。
- ・原ミナ汰、土肥いつき編著『にじ色の本棚』、東京:三一書房、2016年。
- ・『ユリイカ 特集:男の娘』第47巻第13号、東京:青土社、2015年。